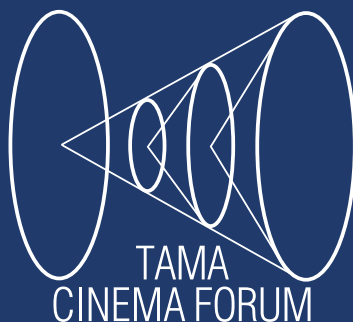


映画と 街と 人をつなぐ 35年の軌跡

1991 - 2025

映画祭
TAMA CINEMA FORUM
35周年記念



TAMA CINEMA FORUMは
「映画を通した21世紀の
まちづくり」をめざします

TAMA映画フォーラム実行委員会



皆さまに支えられてお陰様で 35 周年

35 周年の感謝と これからの TAMA 映画フォーラム

竹内昇

(TAMA 映画フォーラム実行委員会 委員長)

35 周年。長いようで短い時間でした。

私自身は 16 年目の在籍なので、振り返って思い出すのは、やはり一緒に動いてくれていた実行委員とのエピソードが多いです。皆で試行錯誤を繰り返しながらフォーラムを作ってきた者たちです。今のようなシステムティックな運営が確立されていなかったのも、1 年目にいきなり会費を 3 つも 4 つもやったり、やってもらったり。手作りのチケット印刷をずらして印刷してしまい何度もボツにしてみたり。ゲスト交渉に行った相手にいきなり席を立たれてしまったり。成功した思い出より失敗した思い出のほうが多く浮かんできます。

それでも真夏の炎天下のなか、浅川の土手を「パートナー依頼の資料」をカバンに詰め込んで「こりゃあロビンソンだ」って、みんなでスピッツのロビンソンを歌いながら歩いて行ったり。終わってから「お腹が空いた」って牛丼屋でバクバク、井をかきこんだり。そんななかで快く「チラシを置いて行っていいですよ」とかねぎらってくれる商店街の皆様には何度も癒されました。

映画祭や特別上映会は企画、配給交渉に加えて汗を流してくれる実行委員、観客として足を運んでくれる方々の多くの支えの賜物です。

35 周年を振り返り、感謝・感謝です。実行委員と観客がいるかぎりこのフォーラムは今後もヨタヨタしながらも長く長く歩いて行けると信じています。今後は「新しい酒は新しい革袋」に入れながら若い力の発酵を楽しみにしていきます。



第1回(1991年)のゲスト 淀川長治さんと楽屋で

TAMA 映画フォーラムの思い出

野坂きよか

(TAMA 映画フォーラム実行委員会 名誉委員長)

1971 年(昭和 46 年)、多摩ニュータウン入居の頃は、「陸の孤島」「文化果つるところ」などと報道され、交通・医療・教育、すべてが不便でした。子どもの文化に関わる図書館や児童館なども皆無でしたが、そんななか母親たちが地域で、本を中心とした子どもたちのたまり場としての「なかよし文庫」を、その後テレビだけでなく子どもたちに伝えたい、観せたい映画をとの思いから「親と子のよい映画を見る会」をみなさんとともに立ち上げ、活動を続けました。

それから 20 年を経て、多摩市制 20 周年事業として始まったのが「TAMA CINEMA FORUM」です。運営も上映作品の手配もゲスト交渉も初めての経験でしたが、それまでの活動と仲間の支えが映画祭への原動力になったのだと思います。初期は実績も信用もなく、フィルムを借りるのにも苦労しましたが、著名な方々の協力が映画祭のブランドづくりに大きな力となりました。

第 1 回映画祭では、淀川長治さんをお迎えできたことが世間に知られる大きな契機となりました。出迎えの車中で交わした何気ない会話はいまでも心に残る宝物です。

2009 年(平成 21 年)の第 1 回 TAMA 映画賞では、受賞者の八千草薫さんが舞台千秋楽を終えて駆けつけてくださり、それ以来多くの俳優の方々が授賞式に参加してくださるようになりました。

2000 年(平成 12 年)の第 10 回映画祭では、『心中天網島』主演の岩下志麻さんが篠田正浩監督とともにご登壇。当初は予定のため難しいとのことでしたが、ご親戚の結婚式帰りに駆けつけてくださり、「この映画祭が末永く続くようお祈りします」とのお言葉をいただきました。大女優の品格と温かさ、美しさに胸が熱くなりました。

35 年を振り返れば、地元の皆さま、映画関係者、協賛企業、多摩市、市役所、公民館の職員の方々、多くの支えがあってこそこの歩みです。心から感謝申し上げます。



八千草薫さんと野坂名誉委員長



TAMA 映画フォーラムの特長と“いま・むかし”

TAMA 映画フォーラムとは

映画の上映活動だけではなく、「映画を観せる人、映画を観る人、映画を創る人」の交流の場づくりを目指しています。

TAMA 映画フォーラムの特長

市民によるボランティア団体活動

- 村度のないフラットな組織運営
- 映画祭以外にも特別上映会など年間を通して活動

実行委員は多様なメンバー構成

- 高校生から 80 代まで幅広い年代
- 職業・スキル・居住地も多様

実行委員が主体的に運営

- 企画・交渉・運営（配布・制作・配信・宣伝）まで
- 一人ひとりが活動の担い手

3つの柱を持つ唯一の映画祭

- TAMA 映画賞（その年を彩った作品・人物を表彰）
- TAMA NEW WAVE（若手映像作家を発掘・応援）
- 多彩な上映プログラム（国内外の注目作品の上映）



数字から見る“いま・むかし”

規模

TAMA 映画祭は日本で最大級の市民映画祭になりました。

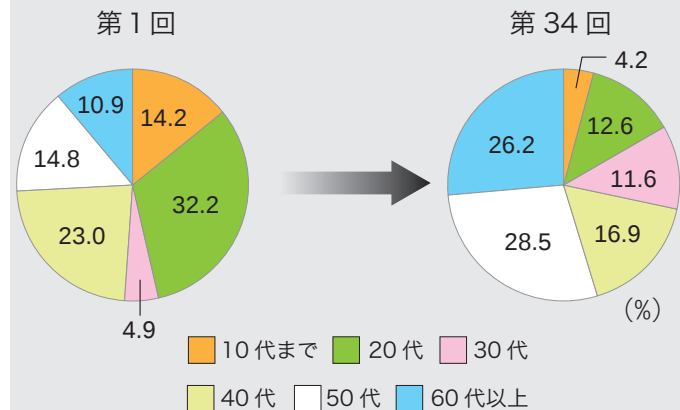
	第1回映画祭 (1991年)	第34回映画祭 (2024年)
実行委員数	22 名	78 名
来場者数(※1)	4,786 名	10,168 名
上映作品数(※2)	39 作品	54 作品
主なゲスト数	3 名	63 名
TVキー局取材数	0 社	5 社

※1：第1回から第34回で466,058名のお客様にご来場いただきました

※2：第1回から第34回で2,165本の作品を上映しました

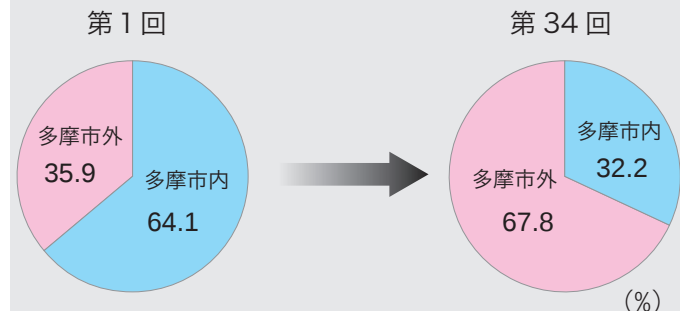
ご来場客の年代

開催当初は50代以上は4分の1ほどでしたが、今では2分の1になりました。



ご来場客の居住エリア

開催当初は多摩市の方が3分の2ほどでしたが、今では3分の2が多摩市外からご来場しています。(%)





2009年に創設したTAMA映画賞はこれまでに多くの映画監督・俳優の方々がこの多摩の地にお越しになり、映画ファンを魅了してくれました。他の映画賞とは違う、市民ボランティア団体ならではの長があります。

1

日本で一番早い映画賞

10月初旬に公表されるTAMA映画賞は、日本映画界の動向をいち早く示し、その年の映画賞の行方を占う指標の1つに。

2

映画ファンによる多様で民主的な選考

多摩市及び近郊のボランティアが選考。男女ほぼ半々、年代も10代から70代まで徹底した議論で合意形成しています。

3

受賞理由に込める熱意と思い

- ・賞ごとに担当者が素案を作成し、全員で意見交換を行い、徹底的にブラッシュアップ。
- ・過去には高校生メンバーが書いた受賞理由に受賞者が感涙したエピソードも。

4

受賞者・映画ファンが一体となった授賞式

- ・映画ファンによる選考を喜ぶ受賞者の想いと受賞者を祝福したい観客・実行委員の想いが重なり、心温まる授賞式の雰囲気醸成。
- ・こんなに温かい雰囲気の授賞式は初めてと感激する受賞者も。

この結果、市民が運営する映画祭でありながら全国規模の報道に結びついています。

- 授賞式には新聞、雑誌、WEBメディアに加えテレビ全キー局が取材
- ワイドショーやニュース番組で取り上げられ、全国的に報道される稀有な存在



第1回 TAMA映画賞(2009年)



第16回 TAMA映画賞(2024年)

[TAMA映画賞歴代受賞作品・受賞者]

	最優秀作品賞	特別賞	最優秀男優賞	最優秀女優賞	最優秀新進監督賞	最優秀新進男優賞	最優秀新進女優賞
第1回	『ディア・ドクター』 『ウルトラミラクルラブストーリー』	八千草薫 木村大作 監督	—	—	深川栄洋 監督 北川悦史子 監督	高良健吾 渡辺大知	満島ひかり 金澤美穂
第2回	『告白』 『さんかく』	若松孝二 監督	堤真一	寺島しのぶ	川口浩史 監督 山本寛 監督	大西信満 金田哲	安藤サクラ 忽那汐里
第3回	『一枚のハガキ』 『奇跡』	故・原田芳雄、阪本順治 監督及びスタッフ・キャスト一同 岸田繁 (くるり)	光石研	永作博美 小西真奈美	深田晃司 監督 前田弘二 監督	古館寛治 染谷将太	井上真央 二階堂ふみ
第4回	『この空の花～長岡花火物語』 『桐島、部活やめるってよ』	『KOTOKO』 塚本晋也 監督 & Cocco 入江悠 監督 & SR シリーズスタッフ・キャスト一同	役所広司	樹木希林 宮崎あおい	ヤン・ヨンヒ 監督 沖田修一 監督	神木隆之介 満島真之介	前田敦子 橋本愛
第5回	『さよなら渓谷』 『横道世之介』	『はじまりのみち』 原恵一 監督及びスタッフ・キャスト一同 『恋の渦』 大根仁 監督及びスタッフ・キャスト一同	松田龍平	真木よう子 吉高由里子	中野量太 監督 白石和彌 監督	星野源 池松壮亮	黒木華 刈谷友衣子
第6回	『野のななのか』 『ぼくたちの家族』	『祖谷物語 ― おくのひと ―』 鳥哲一朗 監督及びスタッフ・キャスト一同	妻夫木聡 大泉洋	二階堂ふみ 池脇千鶴	劇団ひとり 監督 坂本あゆみ 監督	菅田将暉 太賀	能年玲奈 門脇麦
第7回	『海街diary』 『さみしい子』	『野火』 塚本晋也 監督及びスタッフ・キャスト一同	永瀬正敏 綾野剛	樹木希林 綾瀬はるか	岨手由貴子 監督 松居大悟 監督	中島歩 野村周平	広瀬すず 杉咲花
第8回	『オーバー・フェンス』 『団地』	『ディストラクション・ベイビーズ』 真利子哲也 監督&柳楽優弥及びスタッフ・キャスト一同 『ジョギング渡り鳥』 鈴木卓爾 監督及びスタッフ・キャスト一同	三浦友和 オダギリジョー	小泉今日子 蒼井優	前田司郎 監督 小泉徳宏 監督	若葉竜也 村上虹郎	松岡茉優 小松菜奈
第9回	『散歩する侵略者』 『映画 夜空はいつでも最高密度の青色だ』	『夜は短し歩けよ乙女』『夜明け告げるルーのうた』 湯浅政明 監督及びスタッフ・キャスト一同 『パンコクナイツ』 富田克也 監督及びスタッフ・キャスト一同	浅野忠信 池松壮亮	満島ひかり 長澤まさみ	菊地健雄 監督 瀬田なつき 監督	間宮祥太朗 高杉真宙	石橋静河 土屋太鳳
第10回	『万引き家族』 『寝ても覚めても』	『モリのある場所』 沖田修一 監督及び山崎努・樹木希林はじめスタッフ・キャスト一同 『カメラを止めるな!』 上田慎一郎 監督及びスタッフ・キャスト一同	東出昌大 松坂桃李	安藤サクラ 松岡茉優	今泉力哉 監督 三宅唱 監督	吉村界人 吉沢亮	深川麻衣 伊藤沙莉
第11回	『嵐電』 『長いお別れ』	『天気の子』 新海誠 監督及びスタッフ・キャスト一同 『新聞記者』 藤井道人 監督及びスタッフ・キャスト一同	山崎努 井浦新	蒼井優 前田敦子	山戸結希 監督 奥山大史 監督	成田凌 清水尋也	岸井ゆきの シム・ウンギョン
第12回	『海辺の映画館―キネマの玉手箱』 『ラストレター』	『アルプススタンドのはしの方』 城定秀夫 監督及びスタッフ・キャスト一同 『音楽』 岩井澤健治 監督及びスタッフ・キャスト一同	福山雅治 濱田岳	水川あさみ 長澤まさみ	ヒナリ 監督 ふくだももこ 監督	宮沢氷魚 北村匠海	松本穂香 森七菜
第13回	『ドライブ・マイ・カー』 『あのこは貴族』	『花束みたいな恋をした』 土井裕泰 監督・坂元裕二氏及びスタッフ・キャスト一同 『いとみち』 横浜聡子 監督及びスタッフ・キャスト一同	役所広司 菅田将暉	尾野真千子 有村架純	藤元明緒 監督 松本壮史 監督	藤原季節 金子大地	三浦透子 伊藤万理華
第14回	『LOVE LIFE』 『ハケンアニメ!』	『メタモルフォーゼの縁側』 芦田愛菜・宮本信子及びスタッフ・キャスト一同 『恋は光』 小林啓一 監督及びスタッフ・キャスト一同	佐藤二朗 松坂桃李	倍賞千恵子 広瀬すず	片山慎三 監督 森井勇佑 監督	磯村勇斗 横浜流星	河合優実 伊東蒼
第15回	『怪物』 『雑魚どもよ、大志を抱け!』	『君たちはどう生きるか』 宮崎駿監督及びスタッフ・キャスト一同 『リバー、流れないでよ』 上田誠氏、山口淳太監督はじめヨーロッパ企画及びスタッフ・キャスト一同	佐藤浩市 鈴木亮平	菊地凛子 黒木華	福永壮志 監督 金子由里奈 監督	目黒蓮 奥平大兼	山田杏奈 高石あかり
第16回	『夜明けのすべて』 『ぼくのお日さま』	『ぼくが生きる、ふたつの世界』 呉美保監督及びスタッフ・キャスト一同 『リックパッド』 押山清高監督及びスタッフ・キャスト一同	藤竜也 吉沢亮	上白石萌音 河合優実	近浦啓 監督 山中瑠子 監督	松村北斗 齋藤潤	森田想 早瀬憩
第17回	『国宝』 『リノワール』	『ふつうの子ども』 呉美保監督及びスタッフ・キャスト一同 『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』 大九明子監督及びスタッフ・キャスト一同	長塚京三 吉沢亮	瀧内公美 広瀬すず	平一紅 監督 山元環 監督	萩原利久 黒川想矢	桜田ひより 中野有紗

(注) 最優秀男優賞・最優秀女優賞は第2回より制定

TAMA NEW WAVE

若手映画人の登竜門としての歩み

2000年の第10回 TAMA CINEMA FORUM の企画としてスタートした「TAMA NEW WAVE」は、今年で26回目を迎えます。

日本映画に新しい風を吹き込む若手作家の発見を目的としたコンペティションですが、特長はなんといっても、市民ボランティアによる実行委員会が審査を行い、さらに当日の観客が一般審査員として投票し、グランプリが決まる仕組みにあります。観客の目線から「いま一番面白い」と思える旬の作品を紹介しつつ、その後に第一線で活躍する監督を多数輩出してきた点で注目を集めてきました。

TAMA NEW WAVE の魅力のもうひとつは、作品上映だけで終わらない「交流の場」としての側面です。上映前後の舞台挨拶では、監督やキャストが作品への思いや制作の裏側を語り、観客は作り手の熱意に直接触れることができます。会場での出会いがきっかけとなって、新たな作品制作やコラボレーションに発展することも少なくありません。作品を介して人と人がつながり、温かな空気が広がっていく——その雰囲気こそが TAMA NEW WAVE の魅力のひとつです。普段の映画館では味わえない体験ができる場でもあり、初めて訪れる方にもきっと新鮮に感じていただけるはずです。

実行委員として毎年この場に立ち会うたび、若い作り手が次々と持ち込む自由な発想や新鮮な表現に触れ、「映画ってまだまだこんなに可能性があるんだ」と胸が高鳴ります。スクリーンに映し出される挑戦の数々は、観客の心を大きく揺さぶり、映画の未来を確かに感じさせてくれます。

私たちは今後も、映画を愛する人なら誰でも気軽に関われる場を大切に育てながら、未来の才能と出会える機会をつくり続けていきたいと思っています。これからも TAMA NEW WAVE に、ぜひ注目していただければ幸いです。



第10回 TAMA NEW WAVE(2000年)



第26回 TAMA NEW WAVE(2024年)

特別上映会

地元と連携した上映会の開催

特別上映会は TAMA 映画フォーラム実行委員会が選定した優れた作品の上映により、映画文化の発信および地域コミュニティの活性化をめざし、年数回開催しています

『荒野に希望の灯をともし』(2023年2月)

トークゲスト
谷津賢二監督

アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師。自らアフガニスタンの無医村へと向かい医師としてのみならず、後年は無謀とも思える用水路の建設という大プロジェクトに尽力するなど、アフガニスタンの復興に人生をささげてきました。

本作は病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた中村哲医師の偉大な足跡と信念を、21年にわたり撮影・取材し、その軌跡に迫ったドキュメンタリー映画です。

トークゲストには多摩市在住の谷津賢二監督をお迎えしました。大変好意的にご対応くださり、全4回上映のすべてでトークを行っていただきました。

各回大盛況で、大勢のかたにご来場いただき、さまざまな感動・感謝の声が寄せられた、主催者冥利に尽きる素晴らしいプログラムでした。

『すべての夜を思いだす』(2024年2月)

トークゲスト

清原惟監督
五来恒子氏(もしもし代表取締役)
中澤日菜子氏(小説家・劇作家)
南波克行氏(映画批評家)
横溝惇氏(建築家)



高度成長期と共に開発が始まった東京郊外に位置する街・多摩ニュータウンを舞台に世代の違う3人の女性が穏やかに交差するある一日を描いた物語を、劇場公開前の特別先行上映として開催しました。幼少の頃に多摩ニュータウンで過ごされた清原惟監督の記憶が残る多摩市内団地・歩道橋・公園・商店街などがロケ地の作品です。

トークゲストに清原惟監督、もしもし(多摩のフリーペーパー)代表取締役・五来恒子氏、ニュータウンの姿を描いた著書「ニュータウンクロニクル」の著者・中澤日菜子氏、多摩市在住の映画批評家・南波克行氏、多摩ニュータウンの落合団地で活動されている建築家 横溝惇氏と多摩市にゆかりのある方たちをお迎えし、それぞれの思いを語っていただいて多摩ニュータウン愛に包まれたものとなりました。

実行委員がロケ地を巡ってロケ地マップを製作するなど、地元ならではの企画となりました。

記憶に残る歴代の名作・上映作品

アジア

侯孝賢監督特集

第6回映画祭(1996年)
上映作品：
『川の流れるに草は青々』
『戲夢人生』『好男好女』
プレビュー上映『再見南国』
(劇場公開時『憂鬱な楽園』)
トークゲスト：侯孝賢監督
聞き手：字田川幸洋氏(映画評論家)
暉峻創三氏(映画評論家)



「侯孝賢(ホウ・シャオシェン)監督は世界的な巨匠といわれる存在ですが、間近で見た印象は、とても物静かでした。ヴェネツィア映画祭のグランプリを獲得した『悲情城市』の作風のように、物事を離れたところから見つめているような感じです。

会場は、今は無きやまばとホール。舞台に近い席には、監督を一目見ようと熱心なお客さんが席を取っていました。私もまだ実行委員になる前で、一般客としての参加でしたが、最も尊敬している監督を眼の前で見ることができた、とても印象に残っているプログラムです。

邦画

日本映画をどうするのか'97 —俳優・役所広司の世界—

第7回映画祭(1997年)
上映作品：
『眠る男』『うなぎ』
『失楽園』
トークゲスト：
役所広司氏、武藤起一氏
(映像環境プロデューサー)



「日本映画をどうするのか」というプログラムは、映画業界の今を生き抜いている方々の声を聞き、日本映画の今後のありようについて考えていこうというテーマで、初期(第3回～第14回)に継続的に開催されていました。

第7回映画祭での副題は「俳優・役所広司の世界」。当時すでにトップ俳優だった役所広司さんに、まだ歴史の浅い市民映画祭へお越しいただけたことは大変貴重で、多くの来場者で賑わいました。控室で見せてくださった笑顔が印象に残っています。

洋画

永遠の憧れ オードリー・ヘプバーンに愛をこめて

第32回映画祭(2022年)
上映作品：
『オードリー・ヘプバーン』
『いつも2人で』
トークゲスト：
山口路子氏(作家)



2022年に公開されたオードリー初のドキュメンタリー映画『オードリー・ヘプバーン』と、12年間の夫婦の軌跡を描いたロードムービー『いつも2人で』を上映しました。

トークでは作家の山口路子さんをお招きし、オードリーの魅力をさらに深掘りしました。オードリーの美しさのみでなく、多くの人々を魅了した言葉を用いながら、ひとつひとつ丁寧にお話ししてくださり、濃密な時間を過ごすことができました。

また、オードリーのドキュメンタリーはあまり多くの劇場では上映されていなかったもので、多摩の地で上映できたことと、愛読していたオードリー書籍の作家である山口路子さんとお話しできたことはとても嬉しい経験となりました。

邦画

ぼくが生きてる、ふたつの世界

第34回映画祭(2024年)
上映作品：
『ぼくが生きてる、ふたつの世界』
トークゲスト：
呉美保監督、忍足亜希子氏
聞き手：中井圭氏



TAMA 映画賞特別賞、最優秀男優賞(吉沢亮氏)のW受賞を記念して、呉美保監督、主人公の母親を演じた忍足亜希子氏、聞き手に映画解説者 中井圭氏をお迎えして手話通訳つきトークを開催しました。

コーダ(CODA)をテーマにした作品であり、映画祭での企画上映にあたっては手話通訳の存在が欠かせませんでした。初めての試みで、どのように進めていくべきか悩みましたが手話通訳者をご紹介いただき、何度も調整を重ねた結果、無事に企画上映を実現できました。

当日は口頭での案内に加えてボードを用いた案内も行い、ろう者の方々にも配慮した対応を心がけました。会場では、拍手とともに手話による拍手も交わされ、「ふたつの世界」が自然に共存していることを実感できた心温まるプログラムとなりました。

映画祭とあなたのストーリー

35周年を記念して、支援会員の皆さまや過去にご来場いただいた方々から映画祭の思い出を募集いたしました。たくさんの心温まるエピソードやメッセージをお寄せいただき誠にありがとうございました！

八千草薫さん / 第1回 TAMA 映画賞授賞式（2009年）

凛としたたずまい、着物の姿が印象的（ゆみん）

樹木希林さん / 役者・樹木希林（2015年）

普通写真や動画は撮らないでというのですが、全然撮っていいからお好きにどうぞって本人から。なんかとっても嬉しかったです（たまたまセンター）

『夜明けのすべて』 / 第16回 TAMA 映画賞授賞式（2024年）

最愛の妻と一緒に多摩映画祭で受賞作を鑑賞するのが毎年の楽しみでしたが、その妻が6月に永眠し、この作品が妻と鑑賞できた最後の作品となりました。妻と「いい映画だったね」と語り合ったことを思い出します（Manaisland）

横浜流星さん / 第14回 TAMA 映画賞授賞式（2022年）

私が初めて授賞式に参加した年でした。市民の手で続けてこられた映画祭と聞いていましたが、ロビーの設営や会場の雰囲気すごく素敵で感激したのをはっきりと覚えています。横浜さんが当時撮影されていた役の雰囲気そのままに現れて、映画での役の印象と全く違って役者さんて凄いな……と圧倒されてしまいました。好きな作品や役者さんたちの顔を見て直接拍手を送ることができて、とても思い出深い日になりました（えり）

渡辺真起子さん、安川有果監督、月永理絵さん / 映画を横丁で語ろう 2016（2016年）

『ヤング・アダルト・ニューヨーク』を鑑賞後、上記3人のトークがありましたが、私が今でも「すごい贅沢なひとときだった」と興奮してしまうのはその後、下の居酒屋さんに場所を移し、ゲストの皆さんと楽しくおしゃべり出来たことです。あれ以降あんな贅沢なイベントは無かったのではないかと。居酒屋さんでは関西から来た渡辺真起子さんファンの方と席が隣で「信じられないですよ、こんなイベントがあるなんて」と大騒ぎしていました。ありがとうございました（ルー）

福山雅治さん / 第12回 TAMA 映画賞授賞式（2020年）

いつものパルテノンではなかったけれど圧倒的なオーラにやられました（佐々木）

『ヴィレッジ・オン・ザ・ヴィレッジ』『ジョギング渡り鳥』 / カメラの先のユートピア（2016年）

『ヴィレッジ・オン・ザ・ヴィレッジ』は私にとってオールタイム・ベストの映画。それをロケ地である多摩地域で観て、スクリーンの中だけでなく外側にも広がる映画の膨らみを感じ、その中に身を置ける幸福を思った。映画を観たその夜はロケ地の1つである聖蹟桜ヶ丘の「MASCOT.」で食事をして帰宅した。以来、「MASCOT.」には何度か足を運んでいる。数年前に多摩地域から23区に転出したが、映画祭はその後も毎年楽しみにしている（秋房）

北村匠海さん / 特別先行プレビュー：北村匠海初監督作品『世界征服やめた』（2024年）

地元の方たちで作り上げる映画祭に上映していただけたことを北村さんも喜んでいました。私も温かな映画祭だったなあと思っています。そして、SYOさんの穏やかなインタビューも北村さん、萩原さん、藤堂さんの空気感とともにあって、とにかくほっこりとした1日だったのを覚えています（ゆりっぺ）

『隣人のゆくえ』/TAMA NEW WAVE コンペティション（2016年）

初めて一般審査員として参加した TAMA NEW WAVE コンペで観た作品です。ミュージカルなのかミステリーなのかホラーなのかあらゆる要素を感じながら観ていたら、最後にものすごい反戦映画だったことがわかった。斬新で新鮮で奇跡的な映像体験だった。翌年からケイズシネマやシネマロサなどで毎年上映され、わたしも毎年複数回観て、もう十回以上鑑賞している。こんなにいつまでも心にしみ込んでいる映画はそうはない。柴口勲監督は若くして亡くなられてしまったが、監督のメッセージは私の心から消えることはないでしょう（ネコじい）

『これで、いーのかしら。（井の頭）怒る西行』 / 玉川上水から四次元へ（2010年）

映画祭が近づくと、駅前でスタッフの方がチラシを配っていて、気になっていたTAMA映画祭。最初は特定の映画マニアが行くものだと決めつけて遠慮していたところ、「観たい」という気持ちで勝って、ついに足を運んだのが、この映画でした。故・沖島勲監督が玉川上水沿いを散策しながら変わりゆく風景に対する想いを語るだけなのに、引き込まれてしまう。トークでは沖島監督と建築家の坂口恭平氏が登壇。「外側の世界を内側に取り込んでユートピアをつくる、つまりユートピアは自分の中にあるのではないか」という話の流れで、映画の中で散策中に会おう一般の女性について「原節子のように見えてくる」と監督が語り、坂口さんが「その人にも原節子の要素がある」と話していたのが印象的でした。この映画をきっかけに、身の回りの環境や出来事を自分のなかにとり込んだら、人生をもっと彩りのあるものに昇華させることができるか考えるようになりました。そして、この時からTAMA CINEMA FORUMの映画祭や特別上映会に当然のように足が向くようになりました（小倉貝取人）

吉高由里子さん / 第5回 TAMA 映画賞授賞式（2013年）

泣き笑いのなかで、彼女の俳優としての覚悟を知れた、心に響く素敵なおスピーチでした（KENBOH）

『コーンフレーク』/TAMA NEW WAVE ある視点（2020年）

たまたま観てお気に入りになった作品。その後、磯部鉄平監督の関わる作品を観るきっかけになりました（ただの映画好き）

原田美枝子さん / オープニング企画：フォーラム推薦作品（1998年）大林宣彦監督 / 大林宣彦監督特集（2007年）

間近で見た初めての女優さんに感動 & 大好きな尾道三部作の監督を間近で見た感動！（町田浩司）

佐藤浩市さん / 俳優「佐藤浩市」特集（2023年）

親子共演でも話題となった『せかいのおきく』、劇場では上映期間が短くようやく観れた『春に散る』、トークはお茶目なところも見え隠れし、ここでしかきけないレアなトークショーでした（yaya）

『たかが世界の終わり』 / デビュー10周年記念 藤原季節特集 in TAMA（2023年）

コロナ禍で無観客での舞台そのものを映像化し、あきらめず時間をかけて映画として観客に届けてくれたことが、忘れられない作品です。（mayumy）

観そびれた映画や単館上映の映画などをピックアップされ上映してくれるのが嬉しい。毎年楽しみにしています（やまちゃん）



一緒に映画祭を育てませんか？

皆さまのご支援が、映画祭をより豊かに、魅力的に育てていきます。

●「支援会員」のご案内●

TAMA CINEMA FORUM は市民の力で運営する映画祭です。映画を愛する皆さまと共に歩み続けるため、支援会員を募集しています。

会費 1口1,000円から。口数に応じてご参加いただけます。

会員特典(1口以上)

- ・ 実行委員会からのご案内をEメールまたは郵送でお届け(年数回)
- ・ 2～8月に開催する特別上映会のチケットを会員特別価格でご提供
- ・ 11月開催の映画祭プログラムチケットを会員特別価格でご提供

さらに3口以上の方には……

- ・ 公式パンフレットを11月中旬頃にご登録住所へお届け
- ・ 「TAMA映画賞授賞式」チケットの優先申込が可能



お申込み詳細はこちらから



第35回映画祭 TAMA CINEMA FORUM

2025年11月8日(土)～11月24日(月・祝)の9日間

第17回 TAMA 映画賞授賞式 11月15日(土) 会場：パルテノン多摩 大ホール

第35回映画祭記念プログラム 11月16日(日) 会場：パルテノン多摩 大ホール

第26回 TAMA NEW WAVE コンペティション 11月22日(土)
会場：ヴィータホール(多摩市関戸公民館)

各種上映プログラム

11月8日(土)～11月11日(火)、15日(土)～16日(日)、22日(土)～24日(月・祝)
会場：パルテノン多摩 小ホール、ベルブホール(多摩市永山公民館)、ヴィータホール(多摩市関戸公民館)

※11月12日(水)～14日(金)、11月17日(月)～21日(金)は休映

TCFの最新情報はここから



映画祭公式サイト

www.tamaeiga.org

TAMA映画フォーラム実行委員会



X

@tamaeiga



Instagram

@tama_cinema_forum



Facebook

@tamaeiga

